Title	カール・ W・ ドイツェ ウィリアム・ J・ フォルツ共編 『国家建設』
Sub Title	K.W. Deutsch & W.J. Foltz (eds.) : Nation building, 1963
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1965
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.38, No.2 (1965. 2) ,p.95- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19650215-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Karl W. Deutsch and
William J. Foltz (eds.):

Nation-Building

New York: Atherton Press, 1963, xiii+167 pp.

カール・W・ドイッチュ
ウィリアム・J・フォルツ
共編

『国家建設』

本書は一九六二年九月、アメリカ政治学会 (American Political Science Association) でおこなわれたパネル討議の成果として、左の九篇の論文を収録した論集である。

- 一 「ヨーロッパにおける国家建設の歴史的経験」 カール・ドイッチュ
- 二 「国家建設？」 ジョゼフ・R・ストレイアー
- 三 「民族と人間性構造の相互関連」 カール・J・フリードリッヒ
- 四 「アメリカにおける国家建設——植民地時代」
ヘルマン・ウェイレンマン
リチャード・L・メリット

五 「ラテン・アメリカにおける国家建設」

ロバート・E・スコット

六 「国家建設と革命戦争」 デービッド・A・ウイルソン

七 「アフリカにおける国家建設」リューパート・エマーソン

八 「最新興諸国の建設——短期的戦略と長期的問題」

ウィリアム・J・フォルツ

この討議の目的は、「現代世界のさまざまな地域、およびさまざまな歴史的時期における国家の形成を検討している学者たちの見解と指摘を統合し、比較することにある」(Preface)と編者は語っている。現代比較政治学に学問的関心を集中している私にとつて、この観点は見逃しえない語りかけであつたし、正直いつて期待に胸ふくらみ、姿勢を正す想いであつた。それは私が何度か文章にも綴つたことのある、現代政治学の最も手薄な側面である歴史的理解の再構成を意図するものであるはずであつたし、現代のナショナルリズムが、西欧型ナショナルリズム概念をいかに拡充してもしきれぬだけの内容的広がりをもつていくことへの、どのような理論的対応への試みが打ちだされているか、という政治理論的関心にも十分通ずるはずのものであつたし、また地域研究を包摂可能な概念枠組の提示への期待にむくいるはずのものであつた。他方、私が先に論じた「近代化」理論(『政治的近代化の理論と問題』・本誌三十七卷十一月号、昭和三十九年十一月)に欠けている部分への意義ある示唆も提起されているのではなからうか、という過大な期待もひそかにあつた。しかしその大部分は完全にむなしかつた。余りにもむなしかつたこ

とから、私は本書の残された意義すらも認めようとしないうち自分のたくなさをしつつたのは、すでに読了後半歳を過ぎた今日であった。私の知るかぎり、本書は誰にもとり上げられなかつた。それが私をして、ふたたびとり上げさせた所以であつた。

私が失望したのは、私の観点——それも過大の期待をひめた——からしてだけなのであり、本書中の論文で展開されている論旨の中には、だから異なつた観点からは、非常に意義のあるものが多いはずである。読み返えてみて、私は自分の不明を恥じた。私が失望した部分からのべ、意義を発見した論旨にふれる順序を進めることが、ある時期の私を私自身が知ることにもなる。「紹介と批評」で、このような告白が発表されるのは場ちがいかもしれないが。

※

方法論に最大の関心をもつ私にしてみれば、かつて「社会的移動と政治的發展」(“Social Mobilization and Political Development,” *American Political Science Review*, September 1961) で現代政治学における重大な貢献を果たしたドイツチュの「序論」に最大の期待を抱いたのは当然であつた。しかし、「国家建設」という概念は、彼の説明にもかかわらず充実した内容を擁してはいなかつた。すなわち彼は、歴史——それは常に現時点をも包摂することで成立しているはずであるが——は、国家の形成と崩壊の過程であり、その理解は、したがつて、一般的で、斉一的な側面からする研究過程に基づくとする。しかも、この歴史的過程は再帰的であり、こうした再帰的類型から、歴史事象の比較可能性も、独自性の認識も生まれる

のである。別のところでの彼の論述によれば、再帰的類型によつて、政治と歴史のもつ相対的な斉一性の背景が浮彫りにされるのだし、同時にそうした視角からの研究によつて、歴史の累積的变化が明らかになるはずである(“The Growth of Nations: Some Recurrent Patterns of Political and Social Integration,” *World Politics*, January 1953, pp. 168-169 参照)。

こうした基本的認識から、彼は「国家成長」^{ナショナル・グロウ・アップ}、「国家建設」^{ナショナル・ビルド・アップ}、「国家発展」^{ナショナル・デベロップメント}の三つの考え方を区別する。「国家成長」は、彼によると有機体的なイメージを示すものであり、「ある一定の時間的過程を通過し、また成熟へと向かうある一定の質的な諸段階をへることが期待される成長過程」であつて、「それを過ぎると、凋落や死、あるいは、新しいが、本質的には同一の循環経路をとりはじめの再生産だけが存在する」(p. 3) 内容があたえられる。「国家建設」は、建築学的・機械学的モデルである。ちようど、家がいろいろな素材から建築され、そのいろいろな型によつて建築が容易に、しかも迅速にはたされ、しかもその基礎とは独立した上部構造がえられるのと同じく、「国家も、諸段階の別個のつながり方や、計画を異にしていたり、材料もいろいろあることから、建設が急速であつたり、漸進的であつたりするし、その環境とはある程度まで関係なく建設されうる」(p. 3) という認識に対応している。「国家発展」には、右にのべた二範疇の特性である有機体的なイメージと機械論的な側面が共にくみ入れられている。すなわちこれには、「空間と時間」の、内のおよび外的な相互依存性にかんする意識」(p. 3) が対応

している。しかしこうした概念的識別からは、なぜ「国家建設」概念が選択されるのかはでてこないし、ドイツでもそれに言及していないのはおかしい話である。おそらく彼の真意——他の八論文の論旨からして——は、国家が生れ、生長し、凋落する再帰的循環過程や、発展というある意味では合目的でない、パースペクティブを含む路線の検討ではなくして、人間が国家をつくりだす行為の諸相を、常に新しく、現実的な焦点として確認し、これに照準すること、**「人間」の可能性と「歴史」の非情さに対決する学問的意義だ**、とするところにあるのであろう。それはあくまでも、「人間」が「歴史」を選択する機会であるからである。

もし私の右の指摘が正しいとしても、なお彼の範疇区分の意義は認めがたい。それは彼が、「国家建設」の一般的過程として、

(一) 普通の民族国家に政治的に融合されることへの公然たる、ないし潜在的な反抗

(二) こうした同化された政府の命令にいやいやながらも服従するという最低限の統合

(三) 種族的、ないし文化的な集団的まとまりと多様性を常に擁しながらも、この種の通常的な国家に積極的な支持をあたえる点にまで達しているより強固な政治的統合

(四) あらゆる集団を一個の共通した言語と文化に同化してしまうことによる政治的同化と統合の一致 (cf. pp. 7-8)

をあげている点にもみられる。すなわち彼は、この場合には「国家的統合」(彼の範疇では「国家成長」)の過程と、「国家建設」の過程

との識別を明確にしていないのである。なるほど彼は、国家的統合の水準では必ずしも、部族主義とか、種族的、文化的、言語的な集団への帰属が克服されておらず、フリードリッヒが必要条件として指摘した、独立性、結合性、政治的組織化、自律性、内的正統性、の諸要件を備えた「国家」建設の次元とは区別しているかのようである。しかし彼の基本的認識は、「民族国家」建設にあるとしか思えないから、エマーソンが展開したアフリカ諸国の問題を包摂するだけの広がりをもっていない。またこうしたあまりにも古典的な問題意識は、たとえばエマーソンの「ナショナルリズムが、西ヨーロッパにおける古典的モデルから移行するにつれて、東ヨーロッパ、バルカン、およびそれより遅れてアジアと中東の紛糾した複雑さがあらわれ、理論と現実のギャップの程度が明らかになつた」(p. 95)との指摘に対応するだけの現代性を担いきれるであろうか。むしろ問題は、フリードリッヒも指摘しているように、ドイツが考えているような民族「国家建設」が想定できない点に成立しているのである。私の失望はかくてここにきわまるのである。

※

国家的発展の過程と国家的編成の選択の問題は、スイスのデモクラシーを論じたウェイレマンによつて、民族性についての実在的見解として展開される。すなわち、政治という観点から国家建設の過程として生ずるのは、個人による民族選択の問題である。他方ストレイアーが論じた西欧は、部族ないし部族主義を克服して、教権にたいして内的主権を確立する過程から外的主権に到達し、基本的

忠誠を自分に集中せしめることに成功した国王ないし王室を中心として語られる。しかしそこではローマ以来からの *regnum* が単一国家化した型と、分裂した国家型が指摘され、この類型が民族国家への移行時にはたした重要な役割が論じられる。かくして、民族「国家建設」であるかぎりでは、次のストレイアーの指摘は重大な示唆を今日もあたえ続けていることになる。すなわち、「民族国家を建設することは、緩慢で複雑な問題であるし、過去五十年間にくりだされた政治的実体の大部分は、この過程を完成する方向をたどっていない。ただ模倣しているだけでは、それ等の問題の解決にはならない。すなわち、制度と信条がその土地に根を下ろさなければならぬ……成功する最善の機会を有する新興諸国は、昔の政治的単位にかなり密接に対応している国家である。すなわち、一つの持続的な政治的枠組内で長い間生活してきたという経験によって、人民が何等かの帰属意識をえている国家であり、政治的単位が一つの特異な文化的地域にほぼ一致している国家、および外部からの借りものに関連をもっている政治的思考様式と土着の制度が存在する国家である。……他方、国境が以前の政治的単位にまつた關係をもたず、その住民が自分たちの国は、昔の政治的ないし文化的集合体の一断片にすぎないことをよく知っており、またその制度が、人民の習俗とまつた關係をもつていない国家は、おそらく民族国家にはならず、おそらくはやがては、国家として存在しなくなる」(p. 25. 傍点＝内山)。

一方では歴史の重みに耐えた西欧民族国家が存在する。しかしそ

れだけで「民族国家」論が「現代国家」論に等置されてはならない。たしかに現代国家は民族国家的意匠をまもつてはいるが、国家像が民族国家に塗りつぶされないと、学問的苦悩が秘められている。こうした論争点はまずスコットによつて展開される。スコットの指摘によると、「今世紀になつてはじめて、外国の支配とカ圧力下にあつたといふものの、ナシヨナリズムの刺戟を感得し、その住民たちが、ヨーロッパの植民地主義の近代化を推進する力とか脅威によつて生まれた精神的、物質的変化の結果として、ある程度までは、何等かの統一性に達した」(p. 74) アジア・アフリカ諸国とは異なり、ラテン・アメリカ諸国は、長期にわたる実り豊かな植民地時代を有し、大都市国家の文化はその時代に支配階級には移されたものの、その母国であるスペインやポルトガルのもつた半封建制、前工業性はそのまゝ模写されてしまった。だから、「イペリア半島での民族統合を妨げたとまつた同一の社会的、政治的要因の大部分が、ラテン・アメリカの諸共和国の大部分によつて享受された約一五〇年にわたる独立の時代を通じて、国家建設を遅らせるように作用した」(p. 74)。

こうした概観を前提として、近代的な意味での有効な国家建設を考へる場合に、対外問題と国内問題の二焦点が、やはりスコットにも踏襲されている。対外問題は、ラテン・アメリカ諸国の「民族」意識にはほとんど意義をあたえなかつた。広大な土地と少数の住民、とくに国境地帯に散在的にしか人間の居住区がなかつたことと、ヨーロッパの政治的、経済的圧力から、一つには地理的問題か

ら、もう一つはモンロー主義の障壁によつて隔絶されていたことによつて、外部からの「民族」的認識を迫られることはなかつた。もちろん、文化的、経済的な役割をはたした外国もあつたし、アメリカの物理的介入もあつたが、それは右の状況を基本的に成立させる程度であつた。国内問題としての主権、すなわち教会と国家の問題も、あまり破壊的役割を演じなかつた。それは、母国で問題になる以前に独立を達成したその歴史性を勘考しなければならぬ。それに気づいた時、アメリカやヨーロッパの政治組織をモデルにした国家主権の概念を、それほど問題なく導入しえた歴史性も加わつてくる。しかし、文化的、心理的問題という国内問題の第二のセットの点では、この地域の諸国家は惨めである。すなわち、「独立当初から、狂信的な愛国主義的ナショナリズムを推進して、より建設的なナショナリズムの発展を妨げることによつて有効な国家建設に限界をあたえている」(p. 76) 事實は、「対外関係の問題と、いくつかのヨーロッパ諸国を妨げていた国内問題といつた広い分野にわたる問題の大部分が欠如していたにもかかわらず、またいくつかのラテン・アメリカ諸国において著しく物質的、社会的進歩が行なわれたにもかかわらず、未解決の社会的、文化的、および心理的問題から発生する諸問題によつて、依然として国家建設の速度がおくれている」現実と連結する。この未解決の問題領域は、スコットによつてさらに、同一性の問題と適合性の問題として理解される。すなわち、同一性の水準では、強力な個人的同一性の欠如と、国家的な同一性感情の欠如が指摘される。適合性の問題については、社会

化過程において、国家への一貫した態度の基礎となる有力な価値組が共有される風土が存在しない、と指摘がなされる。だから、政治組織にたいする市民の関連も当然分裂するし、かくして市民の個人的充足感も弱い。意見の一致は全体的に存在しなくなる。有効な国家建設へのエネルギーは、そこでは常に結集されない。過度の自己評価と低度の実践性が、ここでは常態になる。スコットがメキシコをとりあげ、いくつかの可能性を指摘しながらも、「外部からの侵略の脅威と、帝国主義の記憶は、ひとたび国内統一にとつて必要な物質的、文化的最低水準が達成されれば、政治過程内でのさまざまな利益を協力関係におき、また統合するのを促進するのにさいして最も強力な触媒になるのではないか」(p. 88) としているのは、現代の国家成立と建設に大きな示唆をあたえるものと考えられるし、この地域での「国家建設」の一つの方向としてまたキューバにみられるような「国家建設」をも包摂しうる点で興味深い。

最も新しく「国家建設」に着手したアフリカは、「国家の時代において、あらゆる人びとが、自分の国家ないし民族国家に忠誠を結びつけることはない」(p. 90) という最も現代的な問題を素朴な形で表出している地域である。それは、政治的社会——政治学的な意味ではなく——の重複性と、現国境の大部分が、民族的構成とは何等のかかわりもなく、分割されたままの形であることによつて関連している。だからここには、従来と同じ方法での「国家建設」も、新しい特異な型による「国家建設」の可能性もともに秘められているといえる。この可能性は、過去の伝統的社会、現在の植民地的な

構造、およびパンアフリカニズム的抱負、の三要素が、同時的、平行的に存在し、それ等が相互的に十分関連しあっているという特性によつて、いよいよ強められる。

この文脈から、アフリカの、バルカン化に近い「国家建設」か、パンアフリカニズムに近いものか、の選択が考えられる。部族の大きさと国家のそれが一致した形のを考えれば、同質性は解決されるであろうが、国家としての存続可能性は危い。アフリカ全体をもつて考えれば、あまりにも多数の人間集団が包摂される点で、国家が成立するかどうか疑わしくなる。現実のアフリカ諸国が、「植民地から転化された国家」という基礎枠組はもっているが、……一般的には、……多数の攪乱力に露呈されている脆弱な構造体である」(p.104) ことと、「全国くまなく行きわたっている全国的大衆政党、政党的意志を履行し、国威を宣揚する民族国家、国の文化を強化し、拡大する全国的教育制度、一般大衆の福祉を準備する国民経済、および内外の敵を撃退する国軍」(p.116) といった理想への努力が、どんな現実的関連をもち、どういつた意義を「国家建設」にもちうるのか。アフリカの「国家建設」は、われわれのもつ概念の再構成を要求する次元に達するかどうかの問題をはらんでいる。アフリカにおける「国家建設」は、regnum と無関係な国家を建設しなければならぬという意味で、従来想定されていたとはまったく異質の現代性を担った問題である。

旧植民地諸国が通過しなければならなかつた一段階に独立闘争や革命戦争があつたことや、独立以後に革命が戦い抜かれることが

「国家建設」にはたした役割がウイルソンによつて論ぜられていることは、この論集をきわめて貴重にしている。ウイルソンの前提は、ストレイアーとは異なつた意味で古典的である。すなわち、「どんなに特異なものであれ、イデオロギーは表現的には、その政治的宿命を自律的に決定する人民の権利の主張である。最低の水準でもそれは、説得力をもつ政治的論理によつて……達成さるべき一つの価値の主張にすぎない。政治的論理は、だいたい単なる対話ではない。それは、程度に差こそあれ、組織的集団による政治活動の問題である。政治的論理は、権力の対話なのである」(p.85)。

この「権力の対話」の現代版をアジアの革命闘争により如実にみいだそうとしたのがウイルソンである。しかもウイルソンにとつて、革命状況前の社会構造がもつ多数の水準におけるギャップの存在が、「国家建設」の致命的問題であるのだし、経済的移動不能性(過少就業)、市民的移動不能性(政治的参加の欠如)、地位的移動不能性(カースト)、精神的移動不能性(迷信) といった「多様な価値尺度にそつた移動不能性」として認識されるのだから、「一組の組織によつて、農村人口の未動員のエネルギーを動員し、彼等をつの大きな活動組織の中にひきいれ、……人間のエネルギーを完全に利用し、参加者に、新しい精神構造、新しい信条、新しい社会組織を理解させるべき教育が行なわれる」革命過程において、「国家は建設されつつある」(p.88) という指摘は十分意味をもつものである。

革命戦争はだから、西欧諸国の「国家建設」の駆動力であつた市

民の組織的運動に代るだけの意義を、その組織的統合と整合的方法にみいだすのである。そこには、人間活動の合理化としての革命がクローズ・アツプされているのである。しかも、革命過程における右の二つの側面の同時的発生が、国家建設を成功させる点で決定的だと、ウイルソンは強調するのである。動員の潜在能力を内蔵している社会が、現在の新興諸国の特性なのだから、「国家建設」の可能性も同時に、この点で成立するのである。

ラテン・アメリカ諸国におけるごく独立期間の長さだけでは、「国家建設」の必要十分条件にはならないことは先に指摘した通りだが、しからは統合的な国家意識の樹立が、たとえばフリードリッヒがいうように、現代の新興諸国には過度に野心的な目標だということになればなるほど、フォルツの問題提起が重要になつてくる。すなわちフォルツは、メリットがアメリカの経験から抽出したように、ある社会の「政治的に関連をもつた階層」間の、ある共通の意識や見解についての強力な自覚の存在、ないし確立に目標をすえることの意義をといている。この種の「階層」が、大衆政党に加わり、エリートと一般大衆とのギャップをうめる役割をはたし、政治文化を大衆に接触させ、各個人に政治的役割をあたえる長期的問題にかかわることは、積極的に推進さるべき側面である。その可能性を、フォルツは新興諸国における大衆政党の特性をとらえることによつて、評価しようとする。すなわち大衆政党は、第一に、「独立」に普遍的アピールを集約したこと、第二に、あらゆる近代的エリートを事実上包含したこと、第三に、この政党は政治的忠誠の焦点とし

ての位置を獲得しえたこと、第四に、種族的、カースト的、地域的差異があつても、普遍目標の追求の点での基本的枠組になりえた。これは、「独立の後にくるもの」に対応しえるアピールを用意できたことにも連結していく。ただ問題となるのは、「権力の限定的強化の初期から、より均衡のとれた社会全体におよぶ国家生長のパターンを生み出す」新興諸国の能力が、「体制と国民との関係を基本的に修正することに指導者が積極的に対決するが、限定的でない政策を採用することによつて、社会の多元性ほどの程度安全に適合し、それだけの見返りをもたらずか」(p. 130-131)を克服できるかどうかにかかっている。しかし少くとも、こうした過程には、「武力反乱、革命、戦争といった見習期間」(p. 131)をくりかえすことを含むと考へねばならない。

※

今までのべてきたように、この論集からは結局、ドイツチュの提起した「国家建設」概念の有効性は検証されない。この「概念」については、せいぜいのところ、スコットが「国家建設は、国家意識がいくつかの集団内に生じ、また程度に差こそあれ、制度化された社会構造を通じて、その社会の政治的自律性を獲得する傾向のある社会過程とか、諸過程にたいする暗喩的な題目なのだ」(p. 82)とべている程度の意味だけをもつた「範疇」と考へるのが至当である。だから、この論集のもつ意味は、「社会変動」過程の現代新興国家的諸相の検討にあるといわねばなるまい。地域研究者は、彼等に往々にして不足がちな概観的指摘と問題点に、その学問的興味を

おぼえるであろうし、政治学者は、たとえばフリードリッヒが示唆している新しい国家概念——国連によつて、国際秩序の限界内で「独立性」を有していると認められた、内的鞏固性を擁する集団——に論争点をみいだすであろう。またナシヨナリズムは、その現代的バリエーションの一つとしては、「文化主義」カルチュラルイズムなのであつて、トータルな概念としての「民族国家」はすでにそれだけの意義をもたないのではないか、という示唆にも態度の決定を迫られるであろう。「現代世界における国家建設は、ストレイアー教授がのべた国王と支配者がしてきたことは、まったく異なつたものではないのか。過去の礎石が何であろうとも、国際的な意見の表明と、国内的計画のために、集団的結束と集団的忠誠をきずき上げることとはできないのか」(p. 32)。

政治学は、フリードリッヒの批判には、まだ回答をあたえることはできない。そこには、西欧への慕情があまりにも強く尾をひいているのかもしれない。しかし、西欧との袂別があまりにも早急である必要はない。西欧を「対象」にした冷静な理解が、まさにこれから必要となる。そして、それとまつたく同質の眼が同時に、非西欧諸国にも転ずることが、要請されているはずである。そうでなければまたしても、「偏向」した関心からの是正の必要が集中的に主張される時をむかえる、前者の轍をふむことになり、学問的力点の振動にすぎなくなる。